

福井県立若狭歴史民俗資料館 企画展

若狭の遺宝

—— 平安・鎌倉の仏像 ——

平成5年5月4日～5月30日



▲ 千手観音立像

ごあいさつ

福井県立若狭歴史民俗資料館長 山本和夫

観世音菩薩は、衆生のすくいを求める声を聞くと、ただちに、救いの手をさしのべ給うみ仏です。

この観世音信仰は、二世紀ごろに、インドにおこったといわれています。それが、シルクロードを経て、中国に伝わり、そして七世紀ごろ、若狭湾岸に上陸し、平城京に伝わったという説があります。それ故に、若狭から奈良に通ずる街道を「観世音街道」といいとする俗説も生まれました。若狭人のわれわれにとっては、俗説とはいえ、愉快的話です。この上陸地点だといわれる若狭には、あちこちの寺や神社などに、すばらしい観音菩薩像が祀られています。羽賀寺と多田寺のそれは、平安初期の作で、若狭での代表のみ仏です。

一昨年亡くなった作家の井上靖は、羽賀寺の十一面観世音を「何とも云えぬ優美の女体の観音さまで、すっきり立ったところは、古代エジプトの女王とでも言いたいような荘厳と気品を持っている」と称え、また、多田寺の十一面観音については「その口もとからも、盲しいたような眼もとからも、何ともいえぬふくよかな笑いが、感じられてくる」といっていました。

なお、江戸時代の作で、白磁の陶器ですが、美浜町の寺に赤坊を抱いた「マリア観世音」が、遺っています。若狭にもかくれキリシタンがいて、こっそりと秘めていたのでしょうか。

このミニ展を催すにあたり、寺院や地区の各位に協力を得ました。厚くお礼申し上げます。

出品目録

[指定区分 ◎重文 △市町村指定]

No.	尊名	時代	所蔵者
1	△木造 観音菩薩立像	平安時代（11世紀）	松福寺
2	木造 観音菩薩立像	平安時代（11世紀）	小浜市内所在
3	木造 阿弥陀如来坐像	鎌倉時代（13世紀）	小浜市内所在
4	木造 観音菩薩立像	鎌倉時代（12世紀）	小浜市内所在
5	△木造 地藏菩薩立像	平安時代（12世紀）	円照寺
6	木造 兜跋毘沙門天立像	平安時代（12世紀）	加尾区
7	△銅造 懸 仏	平安時代（12世紀）[複製]	香山神社
8	木造 懸 仏	鎌倉時代（13世紀）	大飯町内所在
9	△絹本着色 千手観音像	鎌倉時代（13世紀）	万徳寺
10	◎銅像 薬師如来立像	鎌倉時代（宝治二年）[複製]	竜前区
11	◎木造 千手観音立像	鎌倉時代（13世紀）	谷田寺
12	◎木造 不動明王立像	鎌倉時代（13世紀）	同
13	◎木造 毘沙門天立像	鎌倉時代（13世紀）	同

若狭の古代社寺と仏像

1. 若狭三郡と遠敷

福井県は、日本海に面した北陸地方に位置し、敦賀以北のかつての越前国と、奈良・京都、両方の都にもほど近い若狭国から成りたっている。

よく県内では、木の芽峠を境に嶺北、嶺南と言う呼び方がなされ、時として敦賀が若狭国であったかのような誤解を招くが、これは、若狭湾に面した嶺南一帯が、比較的温暖な気候に恵まれ、風俗、習慣とも共通する所が多く、加えて、近世に小浜藩領として長く統治されたためであろう。敦賀郡の中心、敦賀市は、越前一宮であった気比神社が鎮座し、霊亀元年(715)に神宮寺が建立された記録がのこされている。

若狭は丹後国の舞鶴市に境を接し、美浜町と敦賀市の境である関峠に至る範囲を指し、木簡に地名の記される奈良時代頃までは、遠敷郡、三方郡の二郡であったが、平安時代の天長二年(825)に遠敷郡から大飯郡が別れて現在の三郡となった。

この三郡の中でも遠敷郡は、平安時代中頃に編纂された『和名類聚抄』に「国府在遠敷郡」とある通り、律令制時代に若狭国の政治の中樞が置かれたことが明らかである。

また、郡名の元となった遠敷周辺は、7世紀後期創建の太興寺や、8世紀後期の国分寺があり、平安時代初期成立の『延喜式』に「名神大」として所載され、後に一宮となる若狭彦神社や二宮となる若狭姫神社が鎮座するなど、郡の中心地であったことが推定される。

これ以外に7・8世紀に溯る寺院は、若狭全体を見渡しても、三方郡美浜町の興道寺(観音畑廃寺)と、遠敷郡上中町下タ中で布目瓦を出土し寺院ではないかと思われる2ヵ所のみであり、また最近、若狭神宮寺から8世紀の瓦が出土していたことが確認され、初期寺院5ヵ所の内、3ヵ所までが遠敷周辺に集中することがわかった。

また、国府との関係を最もよく示す建物として、11世紀頃から各国に普及したとされる惣社があるが、これは、各国に赴任した国司が赴任国の神社を巡拝する労を省くために国府内、もしくはその近辺に国内諸社の神霊を移して建てた神社である。

若狭では、文永二年(1265)の「若狭国惣田数帳〔太田文〕」(東寺文書)に、「惣社宮、同八幡宮」として始めて登場し、同じ年にまとめられた「若狭中手西郷里田内検帳案」(東寺文書)にも、西郷内の川上里(遠敷谷)に「惣社」の記載があって注目される。これによれば、若狭の惣社が中世初頭まで存続したことが確実にわかり、両記録の公共性から同一社を指すものとも考えられ、併せて前に述べた諸条件も考慮すると、今ではこの社名は見当たらないが、惣社も遠敷付近に鎮座した可能性が極めて高いと考えられる。

なお、この「中手」については、既に大治元年(1126)の「源某所領処分状案」(東寺文書)に、太興寺のある松永地域を「中手東郷」、遠敷地域一帯を「中手西郷」として使用

し、郡の中央を意味する意図が示されている。とりわけ西郷は、国分寺や一宮、及び、国府関連の田地等がそのほとんどを占める国政の中枢ならではの様相を見せ、この地域が、少なくとも中世初頭まで国の中心的な役割を担ったことがうかがえるのである。

さらには、中央との地形的な交流路を考慮した場合、遠敷は、若狭彦神社や神宮寺の門前を通過して最短距離で都とつながる街道の要衝に位置することなどから、近年の研究で遠敷周辺に古代の国府が置かれていたことが推定されるようになった。

この後、政治の中枢は、海上交易などの重要性が増したためか、遠敷周辺から次第に海岸方向に移ったものと思われ、遠敷の西方に中世的地名と言われる府中が残されている。

2. 古代社寺と仏像

若狭では、7世紀後期の紀寺様式の瓦と、平城京第二朝堂院に使用された8世紀後半の同範瓦を出土する太興寺を初め、唐人の姿で天下る大陸色の濃い縁起を伝える若狭彦・姫神社、太興寺と同じく第二朝堂院に使用された瓦を葺いたと見られる神宮寺、詔に基づく国分寺など、既に述べた通りであるが、遠敷地域に都の影響を強く受けた社寺が集まったことがよくわかり、これは古代国府との関係によるところが大きいものと考えられる。

このような古代初期社寺については、実在を裏付ける資料が中世文書にわずかながら散見し、出土物と併せておよその概観を知ることができるが、実際に遺構確認調査が行われたのは国分寺だけで、それも瓦が葺かれないなど極めて異例な特徴を示し、太興寺等についても伽藍の規模も不明、出土した瓦から創建年代や系統を割り出しているだけで、いずれも仏像・壁画等の発見は全くなく、その文化的水準や、延いては後世の豊富な仏教文化形成にどのような影響を及ぼしたかについては、残念ながら明らかにしがたい。

しかし、7、8世紀創建の寺院の概要については、近年とみに全国各地の古代寺院の調査が進み、その成果から同様の塑像や木像、あるいは壁画などが制作されたことが容易に想起されるようになってきており、また一方で、早くから神仏習合の起きた神願寺においても、中央の記録や縁起などの文献資料から、本地となる仏像が造立されたであろうことが想像できる。ただ、当時の仏像として唯一、遠敷に近い太良庄正林庵に中央製作と見られる8世紀末の金銅仏が現存するが、伝来経路については詳細不明で、今の所、中世に京都の東寺から移されたと言う縁起の記述が有力である。

これらの若狭の古代初期寺院も、平安時代初期以降徐々に密教系寺院に変化し、あるいは密教寺院として再興されたものと思われ、国分寺はおよその転化の年代を縁起等からうかがうことができる。中世には太興寺や興道寺は、既に完全な天台系寺院として「若狭国惣田数帳」に列記されるに至った。

3. 若狭の密教寺院と仏像

それでは、最初から密教寺院として建立されたと思われる古代寺院はどうであったろうか。若狭各地には、行基・泰澄・空海などによる開創伝説も広く伝えられ、少なくとも平安時代初期には成立していたと考えられる寺院がいくつかある。

しかも、特に遠敷周辺に多田寺、妙楽寺、羽賀寺など開創の古い寺院が多く、これらの寺院も当初の伽藍こそ現存しないが、多田寺本尊の両脇侍のように当地方の作ながら8世紀末に掛かるうかと言う像も現存し、この頃になると、ようやく若狭での造像の一端がうかがえるようになる。

多田寺は、同寺縁起によると、天平勝宝8年(749)に勝行上人によって開創されたと伝えられ、本尊・薬師如来像が同寺背後の前方後円墳のある峰に出現したと言う。

現存する本尊・薬師如来立像は、檜の大きな一材から頭体幹部、及び台座を彫りだす9世紀初頭の様式を示す像である。しかも、この像の両脇侍として本尊厨子内に安置される二軀の菩薩像は、本尊よりさらに古い様式や構造を示し、本来は、それぞれが別堂の主尊として造立されたと考えられる。中でも十一面観音立像は、檜材の丸彫りとし、やや素材に制約された偏平な表現を見せる地方色の濃い像であるが、各所に見られる様式は奈良の大安寺・唐招提寺の群像に近似し、その直接の伝播が感じられ、都の文化圏にあったことをよく示している。このように創立当初に非常に近い像を伝えているのは多田寺のみである。なお、同寺背後の山系は、薬師如来・千手観音を本地とする若狭彦・姫神の垂跡した山系と同一山系である多田ヶ岳の枝尾根であり、この尾根の末端に出現した同寺薬師如来像との関連も想定される。これと同様のことが、実は妙楽寺縁起にも見られ、行基によって同山系に千手観音が刻まれたと言われ、空海がこの像を発見して堂舎を建立したと言う。また、妙楽寺は、直接遠敷明神との関係を示す伝承が有り、山系を主体とした神仏習合思想に基づく造立であることもうかがえる内容である。ただし、現在の妙楽寺本尊は、10世紀後半の造立と見られる大きな脇面を備えた若狭には珍しい像である。

羽賀寺も、同じく行基自作の十一面観音像を安置し、霊亀二年に草創され、天曆元年(947)に災害に遭い、同二年に本尊を泥中を発見し再興されたことを同寺縁起は伝えている。この本尊十一面観音立像は、檜材一木造りで乾漆を併用する彩色像として若狭では最もよく知られ、当地の平安像を代表する存在であるが、その造立年代は10世紀初頭と考えられており、縁起に言う再興時期に近く注目される。

また、泰澄開山を伝える寺院は丹後街道沿に数ヶ寺あるが、中でも谷田寺は、養老5年(721)の草創をつたえ、泰澄自刻の千手観音を安置したと言われる。現在の本尊は鎌倉時代に造立された寄せ木造りの等身像で、優美な檀像風彫刻であり、同寺は室町時代まで天台宗であったことが記録などからわかっている。

[参考] 若狭の古代社寺関連年表(記事は縁起・記録等より採取・時代は一般区分とした)

飛鳥時代		650~700	太興寺・興道寺建立か(出土瓦の年代より判定)	
	大宝元年	701	大宝律令制定(統記)	
奈良時代	和同3年	710	平城京に遷都(統記)	
		7年	714	長尾明神垂跡 泰澄弟子滑元神願寺建立(神宮寺縁起)
	霊亀元年	715	若狭彦神垂跡建立精舎今号神宮寺(若狭国鎮守一二ノ宮縁起)	
			越前国気比神宮寺建立(家伝下<藤原武智麻呂伝>)	
			泰澄白山登山と言ひ(泰澄和尚伝)	
		2年	716	行基 羽賀寺創建(羽賀寺縁起)
	養老3年	719	行基 千手観音を刻む(妙楽寺縁起)	
		5年	721	若狭姫神垂跡(若狭国鎮守一二ノ宮縁起)
			泰澄 谷田寺建立(谷田寺縁起)	
	天平5年	733	良弁 綱索院(東大寺の前身・金鐘寺)建立(東大寺要録)	
時代		13年	741	諸国国分寺・国分尼寺建立の詔(統記)
		15年	743	奈良東大寺大仏建立の詔(統記)
		16年	744	諸国薬師悔過を命ず(統記)
		17年	745	行基 大僧正となる(統記)
	天平勝宝元年	749	多田寺建立 勝行上人(多田寺縁起)	
		4年	752	東大寺僧 実忠、二月堂本尊十一面悔過修二会開始(東大寺要録)
				東大寺大仏開眼(統記)
			750~800	太興寺・若狭神宮寺改修か(平城宮様式出土瓦の年代より判定)
	天平宝字7年	763	僧満願 多度神宮寺創建(伊勢国多度神宮寺伽藍縁起并資財帳)	
	天平神護2年	766	多田神社建立(多田寺縁起)	
宝亀元年	770	道鏡 下野国に配流(統記)		
平安時代	延暦13年	794	平安京に遷都(日本紀略)	
			750~800	多田寺 十一面観音立像造立か(像の様式より判定)
	大同元年	806	若狭比古神〔封戸〕十戸若狭(新抄格勅符抄)	
	天長2年	825	遠敷郡より大飯郡分離(日本略記・拾芥抄)	
		6年	829	「養老年中、若狭比古神身離脱、神願寺建立」と記す(類聚国史)
			800~850	多田寺本尊 薬師如来立像造立か(像の様式より判定)
			900~950	羽賀寺本尊 十一面観音立像造立か(像の様式より判定)
	天曆元年	947	羽賀寺再興(本尊を泥中より掘り出す)(羽賀寺縁起)	
			1000~1200	諸国に惣社・一宮が成立したと思われる。(時範記・中右記)

展 示 解 説

1. 木造 観音菩薩立像

本像は、天冠台上に本体と共彫りの宝冠を載き、目は彫眼とし、やや丸顔の穏やかな面相を表す。左手に蓮華を持ち、右足をゆるめて台座に直立する。奥行きのある体幹部には、鎬立った衣文線を彫りだし、腰の衣の折り返しはやや形式化した表現が見られる。構造は、檜の一木造りとし、内削りは全く行わず重量のある像である。このような特徴から、本像は11世紀前半頃の作と思われる。台座、及び光背は後補である。

2. 木造 十一面観音立像

天冠台上に11面をいただき、目は彫眼とし、穏やかな顔付きに表現する。肌を表す部分には漆箔を施し、ゆるやかに流れる衣の線も浅く彫りだし、彩色を施す。構造は、頭体幹部を木心を込めた檜の縦一材から彫りだし、内削りは行わない。頭上の化仏は別材で刻み、ホゾで差し込む。制作は、11世紀前半と見られ、平安初期の様式を各所に残す。

3. 木造 阿弥陀如来坐像

本像は、面奥の深い頭部に彫眼とし、流麗な衣文線を浅く刻むなど平安末期の様式を伝えている。構造は、小像ながら頭体幹部を本格的な檜の寄せ木造りとし、胸前の前半材を縦二材とする。また、額の髪際が、やや曲線を描くところや衣褶線の様式などから、むしろ鎌倉時代に入ってから制作であることがうかがえる。

4. 木造 観音菩薩立像

若狭は、観音の多い土地柄で、一説に都へ通じる観音道にたとえられるが、平安時代後期に始まったと言われる西国観音霊場を回る巡礼道が、大飯郡、遠敷郡を通して近江へ抜ける。本像の温和な顔つきや浅く流暢に整えられた衣文線などは、都風の華やかな技法を示している。構造は、頭体幹部を檜の縦一材から彫りだし、前後に割り離し内削りを行っている。これらのことからその造立は、12世紀末期頃と思われる。

5. 木造 地藏菩薩立像

円照寺は、大きな大日如来や不動明王など平安時代後期の密教系の仏像を伝えるが、現在は臨済宗である。本像は、檜の一木造りで下腹部のみに内削りを行い、彩色が施されていたものと思われ、微笑みを浮かべる優しい顔や穏やかな衣文線の表現から12世紀の制作と見られ、当時の優雅な風潮がうかがえる。

6. 木造 兜跋毘沙門天立像

兜跋毘沙門は、西域の兜跋国（トルキスタンか）に出現した守護神と言われ、都の入口や都城の北方鎮護のため安置されたと伝えられる像で、日本では平安時代にしか造られなかった。京都の東寺の像は、中国産の魏氏桜桃材を用いて造られ、平安京の羅城門に据えられていたと言われる。本像は、檜の縦一材から地天(地面の神・女神)

までを彫り出し内削りは行わない。本来は、全身に彩色が施されていたと思われる。

7. 銅造 懸仏

懸仏は、神仏習合の代表的な例で、本来神のよりしろであった鏡にその神の本当の姿とされる仏を線描きしたことに始まり、しだいに浮き彫りや像を取り付ける様式に発展したものと考えられている。この懸仏は、平安時代に鑄造された方鏡の鏡面に鑄造の菩薩をつけ、隅の穴に釘等を通して神社のしかるべき場所に掛けたと考えられる。

8. 木造 懸仏

大飯町と高浜町の境に10世紀の土器を出土する山岳寺院跡があって、古くより牧山と呼ばれ、一乗寺と言う大寺があったと言われている。本懸仏は、この牧山の南の入り口となった宝尾の神社に掛けられていたもので、木製、および銅板の懸仏群として遺され、中には平安時代に入る貴重な遺品が含まれている。

9. 絹本着色 千手観音像

千手観音は、千の慈手に備えた千の慈愛に満ちた目を有し、図では複雑になるを得ないが、規定に基づき42臂などに簡略化して表現される。本図は、本面の両脇に三眼の慈悲面と忿怒面をつけ、頭上四段に化仏を表現する。また、頭上背後には、雲に浮かぶ月輪を描くが、神仏習合に基づく本地を示すものかどうかはわからない。

10. 銅像 薬師如来立像

本像の背中には、若狭国一の宮・若狭彦神の神仏習合による本地仏として、鎌倉時代の宝治二年(1248)に造立された銘文が刻まれている。構造は、銅の一鑄とし、全身に鍍金が施されていたと思われ、鎌倉時代中頃の仏像様式を伝える基準作として貴重である。ちなみに、二の宮となった若狭姫神(遠敷鎮座)の本地は、千手観音である。

11. 木造 千手観音立像

12. 木造 不動明王立像

13. 木造 毘沙門天立像

この三尊一具の千手観音像は、縁起に泰澄開山を伝える谷田寺の本尊である。谷田寺は、現在真言宗に属すが、室町時代末期まで天台宗であった。盛時には12の坊が立ち並んでいたと言われ、名田庄方面に勢力を伸ばしたことがわかる。本尊は、等身の42臂像で、彩色の少ないいわゆる檀像風の仕上である。面相は、彫眼とし端正な中にも厳しい表情を表し、肩に掛かる条帛や天衣、裳には整った彫りの衣褶線を刻む本格的な造像である。構造は、体幹部を櫃の前後二材から彫り出す寄せ木造りで、内削りを施し、化仏や脇手を取り付ける。なお、本尊体内より摺仏が発見された。両脇侍は、ほぼ本尊と同時期の造立と見られ、両像とも彩色が施されている。

※ 最後になりましたが今回ご出品いただきました各位に厚くお礼申し上げます。なお、諸般の事情により所蔵者を伏せました。ご了承賜りますようお願い致します。